住民レベルの地域づくりへの博物館の関わり

－岩手県遠野市立博物館の事例－

Contribution of Museums to Revitalization of Rural Community by resident
-The case of Tono City Museum in Iwate Prefecture-

向井田善朗* 熊谷智義** 広田純一*

Yoshiaki MUKAIDA Tomoyoshi KUMAGAI Jun-ichi HIROTA

(*岩手大学農学部 ** (株) 邑計画事務所)

(Faculty of Agriculture Iwate University. U-Planning Co., Inc.)

I まえがき

最近の地域づくりは、地域の歴史・文化・自然に着目した活動が多くなっている^①。筆者らは、地域の生活文化や自然などに関する資料を収集・保存・研究を業務としている博物館に注目し、それらが地域づくりにどのような役割を果たしているかを、アンケート調査と事例調査によって明らかにしてきた^②。特に前報では、文化行政に力を入れてきた遠野市の市立博物館を事例として、主に行政レベルの地域づくりに対する博物館の役割を実証的に明らかにした^③。

本稿では、引き続き遠野市立博物館が住民レベルの地域づくりにどのように関わり、どのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目的としている。

そのために、同博物館の業務内容の中から、地域との関わりが強い業務を抽出し、それが実際に地域とどのような関わりを持つか、とくに住民レベルの地域づくりにどのような関わりを持つかを、主に聞き取り調査によって明らかにすることとした。

II 遠野市立博物館と地域づくりの関わり

遠野市立博物館は、資料の収集・保存・調査研究・常設展示といった博物館の本来業務のほかに、年間事業計画を定めて、企画展、特別展、博物館講座、きのこ鑑定会、博物館教室、出版

活動等を行って、市民との関わりを持っている。

博物館と地域との直接的な接点としては、①市内8地区をテーマとした特別展（以下、地域展）、②博物館の専門職員である学芸員および博物館と地域をつなぐ民間の研究員（後述）の活動、そして③博物館の分館的施設と位置づけられる市内土淵地区の伝承園が重要である。以下では、この3つの側面から、博物館と地域、および地域づくりとの関係を検討する。

III 地域展を通じた地域づくりとの関わり

地域展は、旧1町7カ村計8ヶ所の地区を順番に取り上げる特別展の一つである。博物館を会場として1995年からスタートし、平成13年の松崎地区をもって一巡する予定である（表1）。

表1 地域展の開催状況

地区名	開催年	観入場者数 内地区内入場者数	地域展展示数 内地区内提供数	提供した 戸数	地区内全 戸数	地区内 人口
附馬牛	1995	616	176 42 (24%)	5	479	1,803
上 堀	1996	1,306	187 123 (66%)	16	1,036	3,447
小 友	1997	1,354	109 81 (74%)	13	479	1,817
土 淵	1998	1,245 60 (5%)	255 202 (79%)	22	689	1,817
青 笹	1999	881 73 (8%)	364 241 (91%)	25	808	2,699
横 越	2000	1,629 202 (12%)	597 102 (17%)	23	594	2,725
遠 野	2001 (予定)				3,223	8,549
松 崎	2002 (予定)				1,551	4,804

(注) () の数字は地元内入場者の割合と地区内提供者の割合。
出所) 資料は遠野市市民生活課。

地域展は遠野市立博物館独自の企画であり、岩手県内の同規模の博物館では見られないユニークなものである（表2）。

表2 岩手県内の博物館との比較

施設	施設面積 (㎡)	人口(A)	地域展の 開催	研究員数 (B)は常勤	研究員の活動内容
A	1,160	30,782	なし	(4)	研究の委託、学芸員の補佐の2種類
B	2,068	37,264	なし	5	学芸員の日常活動の補佐
C	1,200	26,820	なし	4	学芸員との共同研究
D	3,255	63,509	なし	—	研究員は置いていない
遠野	1,391	28,038	定期開催	15	専門分野、地域代表の2種類

出所) 施設床面積は文献引、人口は平成12年度国勢調査、他は聞き取りにより筆者が作成。

地域展における展示資料は、地域内の農家等に保存されている資料が中心であり、地区によってバラツキはあるが、6～9割は当該地域からの提供によるものである。資料の提供戸数も近年では20戸を越えており、資料収集の段階で博物館と地域との直接的なつながりが生まれているのである。また、資料収集に際して、博物館と地域とを仲介する役割を果たしているのが、博物館から委嘱されている各地区の研究員（後述）である。研究員は、地域展の開催に当たって地区にある資料の情報を博物館へ提供したり、自分の専門分野を生かした助言や資料提供を行っている。

地域展は、開催地区の住民にとっては、自分の住んでいる身近な地域がテーマになることで、地域の歴史や文化を見直すきっかけの一つとなるはずである。実際、地域展への資料提供者や入場者には、そうした意義を認めている人がいる。しかし、当該地区からの地域展への入場者は、開催場所が地区内ではなく博物館ということもあって、地区の総戸数や総人口に比べると必ずしも多いとは言えず（表1）、また、地域展をきっかけに地域住民の自主的な地域活動が生まれたという例も今のところない。地域展は、比較的狭い範囲の地域の歴史や文化を丁寧に掘り起こしており、より地域に根ざした博物館活動とは言えるものの、住民の地域づくり活動に結びつくところには達していないということである。

IV 学芸員と研究員を通じた地域づくり活動への支援

1. 学芸員の活動

遠野市は「民俗の会」をはじめ、「遠野常民大学」、「遠野物語研究所」、各地区にある歴史研究会など民間の自主的団体の活動が盛んである。

学芸員は、資料の整理保管、博物館講座、博物館教室、博物館実務実習、前述の地域展の企画等本来業務に加え、これら民間団体からの求めに応じて、資料の提供や歴史編纂作業におけるアドバイスなどの支援を行っている。これら民間団体の活動の中には、特定の地域を活動の場とするものも含まれているが、どちらかと言えば歴史文化をテーマとする同好会的な性格が強く、次に述べる研究員の活動とは違って、必ずしも地域づくりに結びつくものではない。

2. 研究員の活動

(1) 研究員制度

研究員制度は、地域住民の中から博物館活動への協力者を委嘱する制度で、現在は、専門分野と地区担当の二つの視点から15名が選ばれ、2年の任期で委嘱されている（表3）。

表3 平成12年度の研究員と主な活動

	地区	専門	主な活動等
(A)	上郷	歴史・民俗	おしら様などの資料収集、帯田子の商品化、歴史書編纂
(B)	小友	歴史・民俗	歴史書編纂、町老人クラブ連合会長、地区内の石神調査
C	土淵	歴史・民俗	ふるさと村インストラクター、民俗学、曲り家調査
D	松崎	歴史・民俗	歴史研究会、中学生との郷土歴史研究、歴史書編纂
E	遠野	歴史・民俗	元文化館館長、民俗学
F	松崎	歴史・民俗	民俗の会長、年中行事ビデオ作成、鮎馬の調査
(G)	附馬牛	民俗・植物	植物観察(樹皮)、郷土芸能指導、病作りボランティア
H	土淵	歴史・民俗	玩具収集、伝承園を育てる会、まちづくりを考える会
I	遠野	気象	気象(台風、大雪等)に詳しい、青少年健全育成
J	遠野	写真	博物館の写真担当、特別展などの写真も担当
(K)	青笹	造園等	天然記念物に詳しい、郷土芸能保存活動
L	小友	郷土料理	郷土料理教室、地元の漬物・煮つけなどを紹介
M	土淵	染色	伝承園インストラクター、Uターン、音楽指導員
N	織機	新聞記者	新聞社特派員、タウン誌の発行
(O)	青笹	歴史・民俗	神社神主、私有する多くの民俗資料を博物館へ提供

注) ()は区長あるいは地域づくり連絡協議会会長等の協賛者

出所) 聞き取りにより筆者が作成。

研究員の活動には博物館が行う行事に対する直接的協力のほかに、地域の情報を博物館へ提供する役目も果たしている。研究員は、日常的に地域づくりに関わっている人が多く、博物館側もそうした人を研究員に委嘱するようにしているとのことである。

(2) 研究員の活動—資料収集—

研究員の重要な役割の一つは、資料収集の際の地域との橋渡しである。たとえば、平成12年に開催された企画展の際には、展示に関わる寄託資料の総点数3,143点（寄託者45人）のうち、市内からの2,802点（41人）について研究員が寄託者と博物館との仲介を行っている。つまり、地域の事情に精通し、かつ歴史・民俗など専門的な知識を持った研究員が介在することによって、博物館では把握しきれない、地域に眠っている貴重な資料の発見が可能となり、かつ所有者からの資料提供の協力を得やすくなっているわけである。

(3) 研究員の活動一地域づくりへの支援—

研究員は地域づくりにも重要な役割を果たしている。遠野市では、市内8カ所に地区センターを設け^{註4)}、それぞれの地区内での地域づくりを対象に「まちづくり支援事業」^{註5)}を行っている。

表4は、市内8地区における同支援事業と研究員との関わりを示したものである。

8地区のうち研究員が何らかの関わりを持ったのが6地区、そのうち研究員が深くかかっているのが4地区（小友、附馬牛、青笹、上郷）ある。

小友地区では、同地区の研究員を中心に、老人クラブの活動として「歴史探訪」が行われている。その後、郷土史を研究する「小友町探訪会」が平成6年に結成され、大正時代に作られた「小友村勝蹟志」^{註6)}の現代版を作成する活動を行っている。編集に当たっては研究員が中心的な役割を果たし、最終的な原稿校正段階では、博物館学芸員の協力を得ている。さらにその後の「探訪案内板」設置事業にも、研究員が関与している。

附馬牛地区では、同地区の研究員が郷土芸能伝承事業に参加し、若い人々への指導に携わっているほか、市内の中学校でも10年以上にわたって郷土芸能を伝えている。また、現在、小学校で、観賞用の菊づくりの指導を行っている。

青笹地区では、同地区の2人の研究員は、共

表4 遠野市の「まちづくり支援事業」と研究員の関わり

地区名	活 動
遠野町	×「遠野町古跡探検」編纂、○花いっぱい運動、△遠野物語「いろはカルタ」編纂、×夢火り事業、×かがり火復活事業、△町民まつり△奉祭り、△祭演会、×まつ火焚き事業
綾織町	×国道の桜並木手入れ事業、△国道の花壇造り、×南部田植え踊り伝承保存用ビデオ収録、×郷土誌復刻版作成・配布 ×町民旗祭祭、道路の桜植樹、×「天人児」壁画作成、×相模の土俵作り、×伝統芸能教材用ビデオ作成、×ふれあい広場整備事業 ×鎮守の森祭典復活事業、×綾織祭り、△花いっぱい運動
小友町	○民芸資料の収集、△まちづくりプロジェクトチーム、×町民祭り支援、△「小友音頭」製作、×郷土芸能支援事業、×町民祭り支援 ○地場産品「小友羊羹」作成、○岩瀬神社周辺ライトアップ事業、×わが町写真コンクール、○「リンドウ」花壇作り ×「小友ツツジ通り」形成事業、○小友名産品再生流通事業、○「小友探訪」編纂、○「探訪案内板」設置、△「ODENSE 小友プラン」発行 △河川公園整備、×技名人指定事業、×不動産管理委託、×特産物研究と開発
附馬牛町	×東澤寺跡地の環境整備、×姉妹都市青年交流会、×掲示板設置、○郷土芸能伝承事業、○ふるさと村学習会、△早池峰神社周辺環境整備 ×ふるさと探検団、○地域課題研修会、△町民夏祭り、×附馬牛音頭・小唄作成、○史跡等の環境整備、○市政学習会 ×東澤寺小学校跡地環境整備、○附馬牛祭り、×贈り資財の発掘事業、○特産品開発と販売促進、×各種団体リーダー育成
松崎町	×松崎町行事籌備、×花壇作り、×花いっぱい運動、×ゴミ箱作りと集積所環境整備、×各種団体指導者養成研修会 ×徳ヶ石川堤防並木形成事業、×歴史語り編纂
土淵町	×三世代コミュニティ広場作り、○伝統行事支援事業、×広場作り支援事業、×ゴミ箱作りと集積所環境整備、×もくれん並木植樹事業 ×地場産品販売促進事業、○販売所の設置、×かっぱふれあい広場整備事業、×伝承園景観整備事業、△喜喜祭り、○吹雪乱舞祭り ×でんでん町景観整備
青笹町	○名所旧跡案内板作成、○しし踊り国指定無形民俗収蔵保存、○情報誌「笹ふえ」縮小版作成、△木工クラフト中沢神楽面づくり作成費 ○史跡・石碑・伝承等の探訪記録保存、×「青笹ふるさと塾」開設、○花いっぱい運動、○郷土芸能保存伝承事業、○伝統工芸品開発事業 △ふれあい廣芸会、○歴史・文化記録保存事業、△快適環境整備事業
上郷町	○上郷小唄歌碑建立、○喜喜かるた保存研究、○伝統工芸伝承活動、○まちづくり研究会、○「上郷圖書」(地名編)作成 ○まちづくり研究会支援、○史跡・名勝マップ作り、○町名都市間交流、○「シラカバ樹液」採取事業、○花いっぱい運動 ○上郷まつり復活事業、○元気が出るまちづくり事業、×ミステリーツアー、○花壇整備事業、○案内板・説明板の作成

注) ○：かなりかかった △：一部かかった ×：かかわらなかった
出所) 聞き取りにより筆者が作成

に地区の役員を経験し、「まちづくり支援事業」の推進に寄与してきたが、特にこの地区で活発に行われている伝統芸能のしし踊りを中心とする郷土芸能保存伝承活動には、中心的に関わっている。また、史跡や石碑等の探訪記録保存活動や、それらに基づく名所旧跡案内板作成にも関わってきた。

上郷地区では、平成2年、上郷小唄の記念碑づくりの際に、補助事業の受け皿として、「上郷まちづくり研究会」^{註7)}が設立されている。活動に当たっては、同地区の研究員が中心的な役割を果たし、地域の歴史・文化について聞き取り結果をまとめた「上郷閑書」^{註8)}の編纂も行った。この活動を通じて、各種の地域資源が掘り起こされ、その中から、白樺の樹液を原料とした飲料の商品開発が行われている。

以上の地域づくり活動の中には、博物館とは関わりが薄い研究員の個人的活動も含まれているが、郷土史の編纂、伝統芸能の保存、地域の歴史文化にちなんだ環境整備等の活動では、研究員が博物館の資料や情報等を利用することが一般的であり、研究員を通じた博物館と地域づくり活動との密接な関わりが見て取れる。

ただし、このような形でのつながりをもてるのは、元々地域づくりへの関心の高い研究員が配置されている地区に限られており、そうでない地区の場合には、ほとんど博物館との関わりを持ちえないでいる。

V 博物館の分館的施設を通じた地域づくりとの関わり

前報で述べたように、遠野市の文化行政は、1970年代前半に策定されたトオノピアプランによって特徴づけられている^{註9)}。同プランの3本柱の一つである「博物公園都市構想」では、市内7ヶ所に「カントリーパーク」を配置し、それぞれに博物館の分館的機能を持つ資料館を設置するという計画があった。

実際の「カントリーパーク」は、直接市民生活に関係のある学校と総合的な行政サービスを提供する地区センターについては実現したが、

博物館の分館的機能を有する資料館は、土淵、上郷、小友、青笹の4カ所に整備されるにとどまった。しかも、実際に施設が新設され、その後の運営も良好で、資料館としての役割を果たしていると言えるのは、土淵地区の伝承園1ヶ所のみという状況である(表5)。

伝承園は、昭和57年に市立博物館の分館として土淵地区に開設され、萱葺農家が移築された。その後、遠野物語にゆかりの佐々木喜善の記念館も新築されている。当初、市の意向では、これらの施設の管理運営を、土淵地区の「地域づくり連絡協議会」の老人クラブに任せる予定であったが、老人クラブ側が難色を示したために実現しなかった。

伝承園はその後、博物館を所管する文化課から観光課の所管に変わり、第3セクター「遠野ふるさと公社」が管理運営することになった。いわば、観光施設として再スタートすることになったわけである。以来、伝承園は順調に入れ込み客数を伸ばし、現在では、遠野観光の一翼を担う観光スポットとなっている^{註10)}。

観光施設としての伝承園には、土産物ショップや食堂が整備され、売り上げも着実に伸びていったが、そうした中で地元の老人クラブで組織する「伝承園を育てる会」が発足した。「育てる会」は公社と年間契約を結んで、伝承園の環境整備(掃除等)、各種体験(わらじづくり等)のインストラクター、昔話語りの3つを担っている。老人クラブのメンバーは、自分の能力や好みに応じて、これらの役割を分担しており(たとえば、話の得意な人は昔話語りを担当)、それぞれのやりがいや生きがいにつながっていると。また、老人クラブ全体の活動の活性

表5 各分館の整備・活動状況

地区名	施設整備	現在の活動状況
稔 織	未整備	—
小 友	地区センター内の一部	資料の収集は済んでいるが未整理、未展示
附馬牛	未整備	—
松 崎	未整備	—
土 淵	完 了	観光施設及び博物館分館として活動
青 笹	旧地区センター建物利用	予約者のみに対応、展示している
上 郷	地区センター内の一部	岩石・鉱石の展示あり、展示のみに止まる

(出所) 聞き取りにより筆者が作成

化にも結びついているとのことである。

現在の伝承園はふるさと公社が管理する観光施設ではあるが、その一方で伝承園内の佐々木喜善記念館の展示資料は博物館からの貸し出しであるし、そこでの展示も博物館の指導である。また、茅葺き民家の展示品の多くも博物館の所蔵品であり、「育てる会」による昔話語りは博物館の指導を受けている。さらに「育てる会」および伝承園内の染色体験施設には、博物館から研究員の委嘱を受けているメンバーがいる。このように、伝承園は観光施設である一方で、実質的には博物館の分館的機能を有しているのである。

VI 考察

1. 地域展の評価

前述のように、地区ごとの地域展は当該地区からの入館者が少ないこと、およびそれをきっかけとした地域づくり活動が見られないことから、現状では地域づくりとの関わりは薄い。

しかし、「遠野物語」という全国的に有名なテーマを持つ遠野市立博物館にとって、地域展が持つ意味は決して小さなものではない。言うまでもなく「遠野物語」は遠野の代名詞であり、観光の目玉ともなっているが、それが対象とする地域や時代、そしてテーマは遠野市の歴史・文化・民俗の一部にすぎない。ところが、全国的知名度があるだけに博物館としてはこれを主要な課題として扱わざるをえず、実際繰り返し企画展やシンポジウムを開催してきた。しかし、市内のその他の地区の住民にとっては「遠野物語」は必ずしも自分たちの物語ではなく、「遠野物語」への偏重は地元の歴史文化の軽視ともなりかねない側面を持っていたのである。

地域展は、博物館にとっては「遠野物語」を離れて市内各地区の歴史・文化を掘り起こす重要な機会であり、また地区住民にとっても「遠野物語」でない自分達の地区の歴史・文化を見出す大きな機会になっているわけである。

今後地域展をきっかけとして具体的な地域づくり活動に結びつけていくには、地域展の展示

以外の別な角度からの働きかけ（たとえば研究員を通じた働きかけ）が必要と考えられ、博物館にとっての今後の課題であろう。

2. 研究員制度の評価

前述のように、研究員は地区レベルの地域づくり活動に深く関与し、とくに地区の歴史・文化を素材とした活動については、博物館の研究員という立場を活用して、当該活動に貢献している。博物館の方では、地域づくりに積極的に関わっているような人材を研究員として委嘱することで、間接的ではあるが、地域づくりに寄与しているわけである。

ただし、その一方で、研究員の数が少ないこと、研究員のすべてが地域づくりと関わりを持つわけではないこと（分野別研究員もいる）、研究員の地域づくり活動への貢献については研究員の個人的努力に頼っている部分が大きく、博物館の支援が必ずしも十分でないこと等を課題として挙げることができる。

博物館が住民レベルの地域づくり活動にどのように関与できるかを体系的に考え、研究員の位置づけをより明確にすべき時期に来ていると思われる。

3. 博物館分館としての伝承園の評価

現在の伝承園が、地元の老人クラブを中心とした地域住民に活動の場を与え、それが当該地区の地域づくりに寄与していることは既に述べた。その意味で伝承園もまた、遠野市立博物館の地域づくりへの関わりの成功事例と言えるが、この事例で興味深いのは、当初博物館の分館としてスタートする際には、施設の管理運営への地元の協力が得られなかったのに対し、観光施設として再出発し、入込み客が増えて収益が期待できるようになった後には、地元住民の関与を引き出すことができたという点である。地元住民にとっては、公的施設の管理ではなく、観光施設の運営への参加に魅力を感じたのである。

伝承園の場合、遠野物語の舞台の近くにあるという特殊な立地条件にあるので、他の事例にそのまま当てはめるわけにはいかないが、博物館もしくはその分館の施設に観光的要素を加えることで、来訪者の増加を図り、かつその運営

管理に地域住民の関与を引き出すという手法は参考になるように思う（伝承園は当初から計画的に行ったわけではないが）。とくに、全国各地に数多く見られる歴史民俗系の資料館（その多くは管理運営体制が貧弱で、来訪者も少なく、有効に活用されているとは言い難い）の再整備の一つの方向性を示しているように思われる。

Ⅶ おわりに

本論文では、遠野市立博物館が、「地域展」、「研究員制度」、「分館的施設」の3つを通じて住民レベルの地域づくりにどのように関与しているかを明らかにした。現状では、それぞれについて、まだ課題も多く残されているが、地域との関わりを目指す市町村レベルの博物館の一つのあり方を示していると考えられる。

最後にこの調査を進めるにあたって多くの方々のご協力を頂いた。調査全体の構成に対して適切なアドバイスを頂いた博物館学芸員の小笠原晋、前川さおり、長谷川浩各氏、市民生活課の阿部正秀、小向孝子両氏、地区センター活動に関する情報を提供して頂いた各センター所長、藤田榮、工藤定見、福嶋武男、佐々木了治、高砂子秀敏、浦田穂一、柳田三五郎氏ら研究員の方々、さらに伝承園の支配人である谷地信男氏、これらの方々深く感謝申し上げる次第である。

[注]

- 注1) 本研究では、地域づくりを「地域のコミュニティのメンバーが協同で共通の目標に向かって行動し、そのことを通して、地域の実践力や自己管理能力あるいは地域の問題解決能力を高めること」としてとらえている。詳しくは文献[3]参照。
注2) 詳しくは、文献[1]を参照のこと。
注3) 詳しくは、文献[2]を参照のこと。
注4) 地区センターの活動は、①社会教育の充実、②健康づくりの推進、③文化活動の推進、④コミュニティ活動、⑤基盤整備の充実、⑥支援育成事業、に分

けられ、毎年各地区センターからは年度始めに計画書と報告書が提出される。なお、地区センターの所管は市民生活課と社会教育課である。

- 注5) まちづくり支援事業として、平成3年から各地区毎に100万円を交付し、地域づくり活動の支援に当てている。事業種目は、①住民主導の地域づくり、②地域自慢のふるさとづくり、③景観形成を支援するもの、④その他魅力ある地域づくり、となっている。行政側では「使途に注文はつけない」という姿勢で、住民による自由な地域づくりを支援している。
注6) 地域の歴史や文化について、大正年間に書き残されたものが「小友村勝蹟志」である。これを基に、現代版として「とおの小友探訪」が作られた。文献[6]を参照。
注7) 地域づくり連絡協議会の傘下に、若者を中心に組織された上郷地区独自の組織である。
注8) 平成4年度には、「上郷開書」、翌年には姉妹編の「上郷開歩（もんば）」を発行している。後者については、文献[7]を参照。
注9) トオノピアプランについては、文献[4]を参照。
注10) 平成11年度の伝承園入館者数は7万5千人（聞き取りによる）であり、博物館本館の4万2千人（平成11年度文化事業実施報告書による）を大きく上回っている。

[引用・参考文献]

- [1] 向井田ほか(1999):「地域づくりの担い手としての博物館・資料館の現状と可能性」、農村計画論文集(第1集), pp.31-36.
[2] 向井田ほか(2000):「行政レベルの地域づくりに対する博物館の役割」、農村計画論文集(第2集), pp.85-90.
[3] 広田(2001):「地域コミュニティが自己管理能力や実践力を身につけるために」、『ORYZA(オリザ)』, 53号(2001年4月), 岩手県企画振興部市町村課, pp.28-29.
[4] 千葉富三(1978):「トオノピアプランナーその視点と原点一」、都市計画協会, 新都市, 1978.10
[5] 岩手県博物館等連絡協議会(1997):『岩手の博物館』, 熊谷印刷出版部
[6] 小友町探訪会編(1999):『とおの小友探訪』, 小友町地域づくり連絡協議会発行
[7] 上郷まちづくり研究会・上郷開歩編集委員会編(1994):『上郷開歩』, 上郷町地域づくり連絡協議会発行

In recent years, an area to have kept regional revitalization that adhere to gets prosperous. The land there is museum historically and as facilities that treat a culture as being peculiar. We considered it in detail about a relation for an area by a resident and museum that I adhere to. The result, that special exhibition and research worker system to have treated an area are important. Further, a relation also with museum and annex is important of regional revitalization.